

令和5年度 神奈川県立大師高等学校 第1回学校運営協議会 議事録

日時 令和5年6月24日(土) 13時00分～14時40分

場所 大師高等学校 会議室

出席者 学校運営協議会

中村委員(会長) 石塚委員 鈴木(伸)委員 原委員

[学校側]

校長(副会長) 副校長 教頭 菅原総括教諭 廣田総括教諭 白倉総括教諭

青柳総括教諭 佐々木教諭 邨上教諭 山下総括教諭 以上14名

【第1部】 全体会 *司会：亀田教頭

○開会のあいさつ・委嘱状交付 (校長)

○出席者自己紹介・会長互選

中村委員を会長に選出

○令和5年度本校の学校運営について(副校長)

4年間の期間を想定して立てた目標(令和2年度策定)を、「どのくらい達成できたのか」という視点から振り返る必要がある。4年間で大師高校がどうなったのか、生徒一人ひとり、保護者、地域から愛される学校にできたのか等々。それらのすべてを新しくするわけではない。DDPの掲げる目標に関して言えば、実現できていると感じられる。また、学校が楽しい場所だと感じる機会を設ける事ができた。

進路の面では、自分で選んだ道で進路に向かっている生徒が増えている。コロナ禍の4年で、地域との共同は停滞していった。しかし、モニターや空調設備の導入など、良い面もあった。それらを活かし、途絶えていた地域とのつながりをどう復活させていくのかを考えていきたい。異校種(中学校)の授業見学や授業研究への参加の機会は、授業改善を進めるためにお互いにとって良い刺激となっている。

【第2部】 部会

(1) 部会ごとに協議

Aグループ(学校生活サポート部会)

司会：副校長 書記：山下総括教諭

中村委員 原委員 廣田総括教諭 邨上教諭 青柳総括教諭 山下総括教諭

最初に各グループリーダーより、令和5年度学校評価の取組内容に対する具体的な方策及び評価の観点を説明する。(令和5年度学校評価報告書を参照)

(司会)：各グループからの説明に対してご意見等を出していただきたい。

(委員)：学校評価報告書の書き方について、具体的な方策を示し、数値結果を示すことで終わっている学校が8割方である。数値を含む結果を示すのは良いが、それにより具体的に学校がどのように変わったかを示す必要がある。例えば、部活動の加入数が増えたことで学校がどのように変わったか。生徒の欠席数が減ったことで学校がどのように変わったかなど。

(委員)：今年度の生徒の様子はどうか。

- (学校)：1年次生については落ち着いている。授業も普通に行われ、午後の授業でも寝る生徒が少ない。
- (委員)：最近のふれあい館の変化について、在県外国人以外にも問題を抱えた近隣の中学生が多く集まる。ネットの普及により中国人を中心に活動範囲が広域化している。(東京都心など)
- (委員)：学校要覧の生徒の通学所要時間をみると、90分以上の生徒が数人いる。この生徒が大師高校を選んだ理由を調べたりすることも必要である。
- (学校)：部活動を意識して選ぶ生徒や生活環境を変えたいと思い選ぶ生徒などが考えられるが、生徒に話を聞いてみたいと思う。
- (学校)：本校を受検する中学生に対しては、どのような生徒でも受け入れ、全職員で面倒見を良くしていくというスタンスで取り組んでいる。
- (委員)：大師高校はもともと在県外国人を受け入れる下地がなかったが、在県外国人特別募集枠が増える中で少しずつ取組みが進んだ。今後は日本語指導やシステムの確立が重要である。中退する生徒、経済的に厳しい生徒などが多くいる中で、卒業して自立していった先輩らの話を聞く機会を多く設けることが必要である。

Bグループ（学習・進路サポート部会）

司会：教頭 書記：高橋教諭

石塚委員 鈴木（伸）委員 白倉総括教諭 菅原総括教諭 佐々木教諭

「進路希望実現に向けた学習支援。進路指導の取り組みについて検討」について

- (学校)：どの学校でもそうだが、「どうやって出口を保障するのか」が本校では重要である。浪人もよしとする学校もあるが、本校はそのまま送り出すわけにはいかない。送り出した末に浪人すらやめてしまった生徒もいる。このため、「卒業時の進路未決定率が0に近づいたか」が評価軸となる。実際には進路未決定率は13.8%だが、担任を中心に生徒の意見や悩みを聞く場を設けている。卒業してからしばらく考える時間をつくりたいという生徒にどう対応するかが課題である。
- 現在の3年次生の進路希望未決定者は0である。
- (委員)：浪人をやめた卒業生は進学を諦めたのか？
- (学校)：諦めている生徒が多く、アルバイトをするといったケースが多い。
- (委員)：総合学科のときは進路学習に重点的に取り組んでいたと記憶しているが、現在はどうか。
- (学校)：総合的な探究の時間（特に1・2年次）でキャリア教育の内容を行なっている。事前事後学習を含めた上級学校の話聞く場を設けている。
- (委員)：進路希望未決定者はいないが、結果的に進路未決定にはなってしまうことについてはどうか。
- (学校)：実際に進路活動を始めるとうまく行かないことがしばしば起こる。進路活動を始めて、具体的に進学先が固まってきてから、経済的な面で就職に切り替えるケースもあった。学費が理由となるケースへの対処としては、早い段階で指導していくことが必要である。

(学校) : 学費や学校ごとの奨学金など、金銭面のことを話す場を設けるようにしたい。三者面談で保護者と話してようやく家庭に伝わるといったケースもある。

(学校) : 昨年度から保護者への説明会も行なっている。金銭面での準備について、家庭に理解してもらいたい。

カリキュラムについて

(学校) : 新カリキュラムが導入されて2年目となる。本校は普通科の単位制であるが、カリキュラムが変更により未履修や未修得の生徒の中には変更の影響で一部の科目の履修が制限されるケースがある。

(委員) : 大師高校では単位落としても進級は可能なのか。

(学校) : 基本的には可能だが、未修得単位が多い場合、上の年次にあがり単位を取り直すか、もう一度同じ年次をやり直すかの2パターンある。だが、新教育課程だと他年次の授業の取り直しが上手くいかず、3年間での卒業が難しくなるパターンも想定される。

(学校) : 頑張っって取り組むが、結果の出ない生徒に対しては、補習や特別な課題で評価する工夫をしている。

(学校) : 教員側はまじめに取り組む生徒に対して、その努力を評価している。

進路指導について

(委員) : 求人票はいつ頃、どれくらいの数がくるのか？

(学校) : 7月の時点で約1600社の求人がくる。コロナ禍で数を大きく減らしたアパレル販売関係も、少しずつ数が回復してきている。

(委員) : 求人数が増えると生徒とのミスマッチも増えてくるのではないかと？

(学校) : 生徒に会社のリサーチをしっかりと調べさせて、職業へのイメージを現実に近づけることが必要である。製造業＝工場での立ち作業と思い込んでしまう生徒も多い。イメージと実際の職業のギャップを埋めるため、生徒に丁寧に話をしていくことが必要である。

まとめ

(委員) : 進路学習は重要である。3年間を見通して総合的な学習の時間やキャリアの行事といった学習の場を作っていくことが大切である。だが、高校生なのだから生徒の気持ち揺れ動くことも考慮する必要がある。未決定率0よりも、考えさせた上で多少の未決定者が出てしまうのは仕方ないのではないかと。3年間通して考えさせることがこの学校には重要である。

(委員) : 新旧カリキュラムが混合していて難しいことも多いのではないかと。科目の内容が大きく変わったもの、そうでないものと別れているので教員の苦労も違ってきているのではと思う。また、南大師中との授業見学はどうだったのか。

(学校) : 初任者を中心にすべて教科から行かせた。タブレット端末を使う授業が参考となったようなので、一人一台端末の授業実践にむけての学びの場となれば良いと思う。

(委員) : どんな授業なら生徒の興味を集めることができるのか。中学校の授業は参考になるのではないかと。色々見ることが大切。

(2) 協議の報告

Aグループより報告

生徒指導について、教員間で共有化することが重要。また、生徒に対して「何やってんだ」ではなく、「どうしたんだ」といった声掛けを心掛け、スムーズにやりとりできるようにする

学校目標について、方向を決めつつ目標を立てる。成果を具体的に振り返る必要がある。

在県外国人に対する取り組みについてはこの4年間で定着してきている。生徒にロールモデルを見せることは大切なので、卒業生や関係のある社会人等の話を聞かせて相談にのるなどの企画を実施する。

Bグループより報告

新旧カリキュラムの混在で、難しい時期である。来年度に向けて整備していけば落ち着くのではないかと。文部科学省の授業改善をいかに進めるかは大きな課題である。

南大師中の授業見学は学校も手応えを感じる。お互いに刺激しあう場にしたい。

進路について。「産業社会と人間」の科目は「総合」で補っている。進路未決定者数0は目標だが、考える過程で悩んでしまうのは仕方ない。ただし、何も考えていないことが原因の進路未決定者数は0に近づきたい。

(3) 事務連絡（研究広報グループ）

第2回学校運営協議会は11月7日（火）に開催する。

(4) 閉会のあいさつ（校長）